

氏名 山 本 和 秀

学位の種類 医 学 博 士

学位授与番号 甲 第 463 号

学位授与の日付 昭和53年3月31日

学位授与の要件 医学研究科内科系内科学専攻
(学位規則第5条第1項該当)

学位論文題目 第一編 **Morphological studies of the spleen in idiopathic portal hypertension (so-called Banti's syndrome without liver cirrhosis) using light microscopy, scanning electron microscopy and histometry**

(光顕, 走査電顕及び組織計測を用いた特発性門脈圧亢進症脾の形態学的研究)

第二編 **Morphological studies of the spleen in splenomegalic liver cirrhosis comparing with the spleen in idiopathic portal hypertension (so-called Banti's syndrome without liver cirrhosis)**

(巨脾性肝硬変症脾の形態学的研究—特発性門脈圧亢進症脾と比較して)

論文審査委員 教授 木村郁郎 教授 大藤 眞 教授 小川勝士

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

特発性門脈圧亢進症(所謂 Banti 症候群で肝硬変症を伴わないもの)及び巨脾性肝硬変症の脾臓について, 光顕, 走査電顕及び組織計測を用いて形態学的に検討した。

両疾患における脾腫大は以下述べるように互に近似し, 本質的な差異は認められなかった。即ち, 単位体積中では白脾髄体積が減少し, 逆に赤脾髄体積が増加していた。脾臓全体では赤脾髄体積の増加が巨脾の形成に重要な役割を果していた。走査電顕による観察では, 白脾髄内のリンパ球が減少し, 中心動脈周囲に細網細胞が管状構造を形成していた。一方赤脾髄では細い脾洞の増生と脾索の狭小化が認められた。増生した脾洞は束状に配列していた。狭小化した脾索では太い細網細胞が密な網目構造を形成し, 血球成分の貯留, 崩壊に重要な役割を果すと考えられた。

脾動脈末端は両疾患脾臓において, 脾索の細網細胞の間隙に終る開放型であった。

論文審査の結果の要旨

本研究は特発性門脈圧亢進症及び巨脾性肝硬変症における脾臓の構造について主として走査電顕により研究したものであるが、従来十分観察されていなかったその構造について重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。